

序 言



本研究は、2023年にウェブ上で公開し刊行した『周縁観光論』（吉田 2023a）とおなじく、文化人類学的な民族誌的研究と社会学や哲学など周辺諸学の理論的研究とを組み合わせ、現代観光を、その中心的な特徴や現象に着目する視座からではなく、周縁に着目する視座から捉えようとする試みである。ここでいう「現代」は、同書と同様、後期近代、第二の近代、再帰的近代などといった概念によって示される時代を指すが、本研究では現代の中でも21世紀とりわけ2020年代に焦点を当てて、具体的な議論を展開する。なお、第Ⅲ章以下の民族誌的記述における「現在」は、おおむね2026年6月時点とする。

本研究は、いま述べた基本的な視座や時代設定を『周縁観光論』と共有する点で、その続編に当たる。ただし、他方で、本研究はこの前著と異なる理論的枠組みを基盤とし、異なる議論方向性を追究しようとするものでもある。以下、この前著との連続性と差異性について述べることから議論をはじめることにした。

『周縁観光論』は、第Ⅰ章の観光の定義に関する理論的考察を議論全体の足掛かりとし、「ホスト＆ゲスト」論から「観光サバルタン」論へのパラダイム転換可能性の探究という結章での提言を暫定的な着地点とした。ホストやゲストといった範疇にかならずしも割り振ることができない、現代の観光主体が有するサバルタン性（subalternity）への関心は、本研究も共有するところであるが、本研究の一義的な関心あるいは主題は、現代の観光および観光研究に内在するパラドクス¹の探究にある。本研究は、人類学的なパラドクス論に関する理論的考察を議論全体の足掛かりとし、2020年代の楽園観光の周縁的な事例の検討を通して、この主題について暫定的な総括を行うことを目指す。圧縮すれば「周縁楽園観光論パラドクス編」といいうる本研究は、大枠の主題の点では前著の続編に相当するが、パラドクス論の探究やそれに沿った事例の絞り込みといった点では、前著の延長線上にあるというよりも周縁観光論の新たな展開を企図したものである。

この点を踏まえると、本研究の出発に当たっては、まず前著『周縁観光論』と本研究『周縁観光論Ⅱ』に共通の議論基盤を整理し、その上で前著とは異なる本研究の議論基盤を整理するという手順を踏む方がよいであろう。そこで、まず序章で、前著と本研究に共通する周縁観光論の基盤を確認するとともに、前著の問題関心から別の方向性へと向かった所以や経緯を明確にする。その際、あわせて本研究全体の議論構成に触れておく。そしてあらためて第Ⅰ章で、本研究が新たに採用する人類学的パラドクス論という議論枠組みについて論じる。このように、本研究では、序論に一括してよいであろう内容を、前著の議論枠組みとの共通点およびそこからの離脱について整理する序章と、本研究に固有の議論枠組みを新たに説き起こし明確化する第Ⅰ章の、2つに分ける。そのあとは各論であり、第Ⅱ章で民族誌的事実を扱う人類学的研究の基盤にある文化相対主義がはらむパラドクスを検討したのち、第Ⅲ章～第Ⅴ章で現代の楽園観光——その含意は序章で述べる——の周

¹ 日本語では「パラドクス」と「パラドックス」の2つの表記が並存ないし混在する。ただ、paradoxの語幹に当たる doxa は「ドクサ」と表記するのが通例である。この点に鑑み、本研究では「パラドクス」の表記を採用する。ただし、先行研究を引用する場合は、それぞれの表記にしたがう。パラドクスに関連する語や概念の整理は、第Ⅰ章で行う。

縁的な諸形態ないし諸事例を取り上げ、そこに看取される各種のパラドクスを検討し、最後に結章で全体の議論を簡単に総括する。これが本研究のおおまかな流れである。

別の角度から述べれば、本研究は、前半（第Ⅰ章～第Ⅱ章）の一般理論的トピックと後半（第Ⅲ章～第Ⅴ章）の民族誌的トピックとを組み合わせたアンサンブルである。ただし、前半の章の議論にも民族誌的事実や事例への言及は当然含まれ、後半の章の議論にも理論的考察は当然含まれる。こうした複数の理論的検討・民族誌的検討を縦横に織り込んだ研究という特徴を、英字題目の副題では *basketwork* という語で比喩的に表現した。

次に、参照文献と文献への言及について述べる。参照文献は巻末にまとめ、日本語文献（著者のあいえお順）、外国語文献（著者のアルファベット順）、ウェブサイト（著者や公開主体のアルファベット順）に分けてリストアップした。本研究は、これまでの私の研究成果——楽園観光論、観光宗教論、周縁観光論など——の総体を踏まえたものであり、既刊の拙書・拙論の議論に適宜言及すべき記述箇所はおおい。ただ、それをあまりにいていねいに行えば、記述も参照文献も膨れ上がってしまう。そこで、本研究では、できるだけシンプルかつコンパクトに議論を提示することを心がけ、既刊の拙書・拙論の議論内容やそこでもちいた文献やネット情報への言及はある程度のところまでにとどめることにした。読者各位におかれては、必要に応じて、本研究で言及する拙書・拙論の議論箇所——とくに第Ⅰ章・第Ⅲ章・第Ⅳ章は、各論文（吉田 2024, 2025, 2026a, 2026c, 2026d）を微修正し一部の文献記載を省いたものである——を参照していただければ幸いである。なお、邦訳書文献から引用する場合、一部の漢字をひらがな表記に変えたり原書から訳し直したりするなど、原文の内容を変えない範囲で、表記面での変更を一部に加えた箇所がある。

本研究はおもに文献資料に依拠した研究であるが、第Ⅳ章・第Ⅴ章は参与観察やインタビューにより収集した情報にも依拠している。後者のデータ収集に際しては、南山大学「人を対象とする研究」倫理ガイドラインにしたがい、南山大学「人を対象とする研究」倫理審査委員会にて審査を受けた。本研究は、「楽園観光の諸形態を事例とした現代観光のパラドクスに関する人類学的研究」（研究期間2024年6月～2030年3月）の中核を占める成果である。なお、一部の記述は、過去に当該審査を受けた「バリ島と与論・沖縄の観光地に関する人類学的研究」（研究期間2009～2014年度）と「楽園観光地における宗教と観光の合理化に関する研究」（研究期間2014年2月～2024年3月）の成果にももとづく。

これに関連して、読者各位にお願いがある。本研究の第Ⅳ章・第Ⅴ章の記述内容の一部は、SNSを含むインターネット・ガイドブック等の情報や、現地の事情をよく知る方々の手持ちの情報に照らせば、匿名化した情報がある程度特定化されてしまうおそれがある。情報社会化の加速する現代の人類学的研究は、ひとつのジレンマを抱えている。ある程度匿名化してもその効果は決して万全ではなく、かといって極度に匿名化すれば学術的に十分な記述とはならないのである。第Ⅳ章・第Ⅴ章の民族誌的記述においては、匿名性の確保を優先しできるだけこれに配慮した。プライベートなものはパブリックなものとおなじく社会的事実であるが、その取り扱いには慎重な配慮が必要である。読者各位におかれては、本書が学術への貢献を目的にしたものであることをご理解くださり、プライバシーの保護と尊重に十分配慮して、以下をお読みくださるよう、お願い申し上げます。